

協励アカデミー 令和4年度 第3回漢方・皮膚セミナーレポート

開催日 2022年(令和4年)9月25日(日)

開催方法 Zoomによる開催

●漢方

指導講演

宮城・大野薬局

阿部 孝英先生

「処方決定のコツ③」

●皮膚

指導講演

宮城・あい薬局

鈴木 康弘先生

「楽しいHIFUBYO～間違えやすい
皮膚病・見分け方と対処法～」

2022年(令和4年)9月25日(日)
正午より、協励アカデミー令和4
年度第3回漢方・皮膚セミナーが
Zoomにて開催され、総勢99名の
出席がありました。はじめに「協
励十訓」の唱和の後、八田三紀常任
理事より「研修室では来年度の研
修企画を策定していますが、本研
修会のアンケートフォームより、
ご意見・ご要望をお伝えください」
と開会の挨拶がありました。

最初の漢方の指導講演は、前回
(2022年(令和4年)8月7日(日))
に引き続き、宮城・大野薬局の阿部
孝英先生に、「処方決定のコツ③」

という演題でお話しいただきま
した。

本題に入る前に、「前回のセミ
ナーではおもに漢方の病理がテー
マでしたが、今回は漢方の薬理が
テーマです。今回も西洋医学から
漢方医学の考え方に切り替え、頭
を軟らかくすることが漢方医学を
学ぶコツです」とのアドバイスが
ありました。

・同証異薬と異証同薬

一般的には、「同証異薬は、証は
同じだが(処方)薬が違うこと」で
あり、「異証同薬は、証は違うが(処
方)薬が同じこと」と解釈される。
患者さんの証が同じであったとし
ても、処方するときによっては違
う薬となることもあるし、患者さ
んの証が違っていても「源」が同
じであるため、同じ薬となること
もある。

・なぜ煎じ薬にこだわるのか

煎じ薬と顆粒剤には違いがあ
る。コーヒーに例えると「豆、焙
煎、ひき方、入れ方」にこだわった
専門店が提供するコーヒーとイン
スタントコーヒーの違いとなる。

漢方薬であるなら、「生薬、修治、煎
じ方」にこだわった煎じ薬と、元々
液状であったものをドライにした
顆粒剤の違いとなる。

・顆粒剤、錠剤を使う場合でも煎 じ方を学んでおく

顆粒剤、錠剤を使う場合、各漢方
薬の知識として、煎じ方を知って
おくべきである。特に麻黄と大黄
の場合は、煎じ方により効果が大き
く変わる。

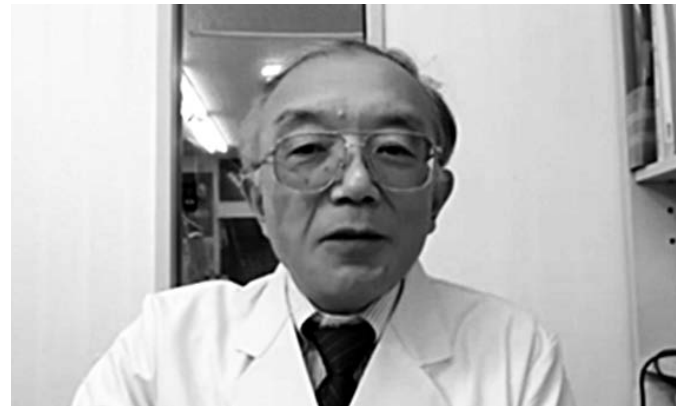
・処方の基本である桂枝湯で、桂 枝の働き方を学ぶ

桂枝湯(桂枝、芍薬、生姜、大棗、
甘草:280ccを120ccに煎じる)は
処方の基本である。原則、処方内
生薬の種類が多ければ、各生薬の
働き方はマイルドになり、生薬の
種類が少なければ働き方はシャ
ープになる。例えば、桂枝甘草湯(桂
枝、甘草)と桂枝湯を比較した場
合、桂枝甘草湯(桂枝、芍薬)の生
薬の数は桂枝湯に比べて少ないた
め、桂枝の働き方は桂枝甘草湯の
ほうがシャープである。

・生薬の働きを理解するには「ボ ク曰く」と「加減法」



宮城・阿部孝英先生



宮城・鈴木康弘先生

「ボク曰く」だけではだめで、「加減法」も併せて勉強すると応用が効くようになる。生薬構成の似た処方と比較すると、処方と比較し全体像をつかむことで理解が深くなる（講演中、甘草乾姜湯、人參湯、苓姜朮甘湯では、処方中の乾姜の量を例として解説がなされました）。

・問診の注意点

薬は「源」に対して処方する。源にたどりつけない場合、患者さんに適切な薬を渡せない。患者さんは常に主観で話すので、客観的に判断できるようにこちらから問うのが問診である。特に、女性は血の道が原因の場合があるので、生理や排卵日の前後で症状の変化があるかどうかは注意して問診する。

以上の内容を、ご自身の経験例とともにていねいに解説していただいた後、「西洋医学では主訴の多い患者さんは心療内科の受診を促される傾向にある。そのような患者さんは、十分な問診による治療を行う東洋医学により治療できる

可能性がある」と締めくくられました。

続いて皮膚の指導講演は、宮城・あい薬局の鈴木康弘先生により、「楽しいHIFUBYO～間違いやすい皮膚病・見分け方と対処法～」というテーマで行われました。

冒頭で先生のご趣味が「虫」であることを話され、「ミヤマクワガタ」と「オオムラサキ」の写真を紹介され、「さまざまな虫の種類を見分けることができるのは、それぞれの虫の特徴（パターン）を認識しているからです。皮膚病も同じで多数の症例写真や症例を見て皮膚病の特徴を認識すれば、皮膚病は判別できます」とアドバイスがありました。

「尋常性乾癬」「ドクガ皮膚炎」など多くの症例写真の紹介に続き、その皮膚病の特徴、原因、治療法についてていねいに解説していただきました。特に、昨今のコロナ禍によるマスクが原因となる「接触性皮膚炎」については、多くの症例が例示されました。また、先生のご趣味の虫が原因となる「虫刺さ

れ」については、虫刺されのステージ分類の解説が行われました。

アトピー性皮膚炎については、治療のトレンドとして近年発売された治療薬の「デュピクセント®（デュピルマブ）」（2018年（平成30年）発売）について触れられた後、「新薬が発売されることにより治療法が変化します。しかし、治療法が変化してもスキンケアの重要性は変わりません」と解説されました。

また疾患名に「老人性～」とつく加齢が原因となる皮膚病についての説明の後、最後に、皮膚病だけではなく多数の疾患で起こる皮膚症状（Signs & Symptoms: 兆候と症状）を紹介されました。

以上、多数の症例写真、ご趣味の虫の写真を例示した解説で、店頭での皮膚病の判断の一助となる内容だったと感じました。

（レポーター 学術研修委員 平松純）